

カンボジア・トンレサップ湖周辺の農業実態

Current status of agriculture around the Tonle Sap Lake, Cambodia

○堀 美菜* 石川 智士** Ponley Heng*** Somony Thay****

Yuthy Ly**** Thuok Nao*** 黒倉 壽*

Mina Hori* Satoshi Ishikawa** Ponley Heng*** Somony Thay****

Yuthy Ly**** Thuok Nao*** and Hisashi Kurokura*

1. はじめに

カンボジアは、古来より米を主食としており稲作が盛んな地域である。しかし長年の内戦のため、農業があまり近代化せぬまま今日を迎えた。内戦終了後、国際的な援助が始まり、国際稲研究所 (IRRI) や Cambodian Agricultural Research and Development Institute (CARDI) などによって農地改良や稲作生産増大のための支援がなされてきた。しかし、これらの国際的な援助が行われた地域は限られており、ほとんどの地域においては、未だ灌漑設備などが整備されておらず、雨季の天水田や氾濫原における伝統的な稲作が営まれている。この地域においての農業は基本的に自家消費的な農業であるため、統計的な資料の収集が難しく、農業経営の現状を示す資料は乏しい。そこで本研究においては、トンレサップ湖周辺地域で行われている伝統的な農業の現状について詳細を報告する。

2. 調査について

調査地は、コンポントム州ストウン郡チャムサックコロムニョンのスヴァイイーア村とスレイロンガツ村の2村である。両村は隣接しており、コンポントム州の州都コンポントムから約40km離れた国道6号線沿いに位置している。2004年の1月29日に村長及びコミュニティリーダーに対する村の概要調査を行い、同年9月1日から11日にかけて村民に対するインタビュー調査を実施した。

3. 結果と考察

人口と世帯

スヴァイイーア村の人口は、1140名(男:女=47.2:52.8)で、世帯数は183件であり、そのうち106件の世帯より回答を得た。スレイロンガツ村の人口は844名(49.4:50.6)で、世帯数は140件であり、そのうち106件の世帯より回答を得た。村の登記によれば、両村における全世帯が稲作を営んでいる。

農業カレンダー

カンボジアの季節は5月中旬から11月中旬までの雨季と、それ以外の乾季に分かれる。両村共に、灌漑設備は整っていないため、稲作はほとんどの世帯で天水田による雨季作が営まれていた。雨季作は、5月中旬頃の雨季の始まりと共に作付けを行い、12月頃まで栽培し、1月もしくは2月に刈入れを行うのが一般的である。ごく僅かの農家は乾季作も営んでおり、この場合2月中旬に作付けを行い、6月中旬頃に刈入れする。

*東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences, University of Tokyo

科学技術振興機構 Japan Science and Technology Agency *Department of Fisheries, Cambodia

****Wisconsin University-Madison, USA キーワード：トンレサップ湖 インタビュー調査 農業 稲作

稲作

一世帯当たりの平均所有水田面積は、スヴェアイイア村において1.39haであり、スレイロンガッツ村においては0.96haであった。一世帯当たりの平均年間稲作収量は、スヴェアイイア村において859kgであり、スレイロンガッツ村においては725kgであった。

表 1 両村において主に利用されている稲種とその利用件数
Table 1 Popular variety of rice and number of households using each variety of rice in studied area

稲種	利用件数	
	スヴェアイイア村 (104件)	スレイロンガッツ村 (105件)
カントー	15	2
サンホック	40	0
ダムネナ	57	35
ネンゴンイ	12	35
ネンゴン	41	44
ネンゴンクサイ	14	0
ネンゴンサー	20	0
ハロム	31	36
ヒロム	15	27
マリ	8	12

両村においては多量の稲種が利用されており、スヴェアイイア村では19種、スレイロンガッツ村においては17種が確認された。一世帯が栽培する平均稲種数は、スヴェアイイア村において2.7種、スレイロンガッツ村においては2.1種であった。両村において主に利用されている稲種とその利用件数を表1に示した。稲種は、ほとんどが在来種であり、5-7ヶ月間で生育する。農民はいくつかの稲種を組み合わせて栽培し、洪水に対するリスクを軽減している。

稲作を行っている世帯の全ての世帯が稲を苗から育てていた。肥料は、家計に余裕のある世帯のみ購入することである。しかし、多くの農民は、肥料は洪水に流されてしまうと捉えており、近年の洪水被害の増大から施肥は基本的には行われていない。殺虫剤は、調査対象地域内では普及していない。収穫が済んだ期は、次の年に苗として植える分を確保し、残りを自家消費する。各村内には脱穀機を所有している世帯が2,3世帯あり、両村ともその世帯で脱穀を行うことであった。脱穀にかかる費用は、1kgにつき150リエルであった(2004年9月現在4000リエル=1米ドル)。

畑作

両村において、大部分の世帯が自家消費目的の野菜や果物を、主に屋敷地で栽培している。栽培している主な野菜は、冬瓜やその他の瓜類、ナス、香草の類であり、主な果物は、バナナ、マンゴーチ、ココナツ、パパイヤであった。一部の世帯(スヴェアイイア村で9件、スレイロンガッツ村で2件)においてのみ、商業的に畑作を営んでおり、スイカとサトウキビを栽培していた。

米消費

一世帯当たりの平均年間米消費量は、スヴェアイイア村において1344kgであり、スレイロンガッツ村においては1064kgであった。両村において、稲作の収量が米消費量に達していない。一世帯当たりの平均年間米不足量は、スヴェアイイア村において453kgであり、スレイロンガッツ村において454kgであった。不足分の米は、全ての世帯が購入していた。

収入

自家消費分の米が賄えず、畑作も自家消費目的であるため、両村における大部分の世帯においては農業収入がない。不足分の米を購入する費用は、漁業収入、労働賃金、借入金によって賄われている。一世帯当たりの平均年間総収入は、スヴェアイイア村において1085000リエルであり、スレイロンガッツ村において881000リエルである。